
るばらびらばらぶる

しいたけ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

るばらびらばらぶる

【Nコード】

N7428T

【作者名】

しいたけ。

【あらすじ】

ぼへぼれぼるぼ、ぼへるんぼ。

るばらびらぶるらばらびりぶるば
ばばらぶらびりばびらぶらるば
びるばるばるべべれるばるば

ある土曜の昼、帰宅すると小人が私の家に居た。

先に言っておくが、私の頭が狂ったわけではない。

先に言っておいたが、小人の鳴き声はすこぶる気持ち悪い。

何故こんなことになったのか考える気にもならないが、とりあえず帰宅する前の私の状況を改めて整理することにする。

私は朝起きて、身支度をして街に行った。別に変わった用事があったわけではない。図書館に行つて、借りていた本を返したただけだ。何の本かといえば、大したものではない。陶芸の本だ。趣味なのだ、これは仕方がない。

陶芸を始めたのは姉の影響だった。姉は少々ヒステリックに陥る気があったために精神を落ち着かせる方法を模索していたのだが、高校生の頃に私もその関連に手伝わされた。その一部に陶芸だ。書道や茶道や剣道、絵画や作曲、ヨットなど、多種多様な面倒事に巻き込まれ、最終的に姉のヒステリックは収まったのだが、私はその流れで陶芸にはまってしまったのだ。

もっとも今の話は小人の出現には関係しないであろうし、姉はこの話にはもう登場しない。ちなみにこれ以上掘り下げる予定も、ない。

そして私は、本を返して図書館を出たのだ。そのあとは特に用事もなく、服でも見てから帰ろうかと思っただが、財布の中身が一切無かったためにとりあえず銀行に寄った。銀行で私は現金一万円を下ろし、それから家に帰った。服屋に行くのが面倒になったからだ。

思い出してみると、帰る途中に変な人物を見たような気がする。ポストに手を突っ込んで「お父さん、お母さん」と叫ぶ中年男性だ。

いや、あれは私の父だったか。

父については特に語ることはない。せつかく引き出した一万円札を父に渡すと、「好きでこんなことをしているわけじゃない」と咳いて父は去っていった。

ばれびるばらばらびるろぶらばらばら

小人がいい加減やかましくなってきたので、私は靴を脱いで部屋に入ることにした。冷静になってみれば、家に小人が居たからなんだというのだ。

着ていたジャケットを脱ぎ捨てると、小人が私のジャケットに群がってむしゃむしゃと食べてしまった。糸屑すら残さず一瞬でジャケットを食べられてしまったので、私はそのジャケットを着て居なかったことにし、今度服屋に行こうと思った。

まあ仕方がない。小腹が空いたような気がしたつもりになって、冷蔵庫を開いた。

ばぼる

小人が卵に頭を突っ込んでいた。すぐにドアを閉めた。

とりあえず、やはり私の頭は狂ってはいない。なぜなら冷蔵庫に小人が入っていると思わなかったし、あんな小さい穴を開けて白身を吸い出している小人を、私の脳内妄想の範疇に置いたことはない。少し腹が立ったので私は冷蔵庫を蹴った。悲鳴が聞こえたが、叫びたいのはこっちだ。

はたして。

何故私の部屋に小人が乱入してきたのだろうか。まさか変質者が

私の家に小人を放ったわけでもないだろう。しかし自然発生したわけでもないだろう。小人の存在を認めるわけにはいかないが、今のところジャケットを食われ、先日買ってきたホットケーキ用のたまごも小人どもに冒されてしまっている。つまり被害は出ているので、小人の存在は現実にあると思っっている。

電話をかけるべきだろうか。私の頭がおかしいと疑われないだろうか。小人が家にいて困る。それを仮に私が誰かから聞いたとして信じるだろうか。

「私の家に小人がいます」

「なんとそれはそれは。では近場の病院までのタクシー代を負擔しましょう、そのかわり二度と私に近付くな」

シミュレートではこれが限界だった。それ以上の会話は思いつかない。

小人が部屋に居る？ ばかばかしい。誰がそれを認めてやるものか。私は父のように頭がどうにかなっているような人種ではない。どうするべきかを考えても仕方がない。とにかく、ひと眠りしてしまえば小人も私に飽きて、どこかに行ってしまうだろう。

窓を全開にして、私はベッドに寝ころんだ。セミの音がうるさかったが、小人よりは静かだろう。

みんみんみんみん、ばびらばびらばらるぼぼる

みんみんみんびび、ねぼれびぼばぶべぼるぼ

みんみんぼるぼり、べべべべりびぼぼるぼばぼ

みんみ

私はすぐに起き上がり、顔を洗うことにした。

これ以上小人の鳴き声に耳を傾けていれば、私の口癖が「ぼべるんば」になってしまう。

朝、めざましテレビを見ながら「ぼべるんば」。歯を磨きながら「ぼべるんば」。シャワーを浴びながら「ぼべるんば」。ベークン

エッグを食べながら「ぼべろんば」、いや、卵はもう無いのだ、小人で代用しよう。きつとその小人を卵代わりに使つと、「ぼべろんば」と喚きだすのだ。ざまあみる、ぼべろんば。

洗面所に向かう途中、私はふと思いついた。

ペットに名前を付けると愛着がわくように、小人にも名前を付ければ愛着がわくのではないのか。

だが言っておこう。私は断じてペットのように小人を扱いたいわけではない。ペットには積極的接近理由のために愛着を求めるわけだが、私は妥協と諦めを込めて、愛着を無理に持とうとしているだけなのだ。よろしくな、「ぼべろんば」。返事はばればびばらべだった。

そろそろ疑問に持たれてもいいだろう。何故私は、小人を追いだそうとしないのか。もとい、駆逐しようとしなののか、もとい、絶対的武力による殺戮によつて彼らの未来を根こそぎ奪う真似をしないのか。

答えは簡単だ。

私が小人に対してつけこまれてしまえば、小人は私の家に住み込むに決まっているのだ。小人の感覚は知ったことではないが、冷静に考えて、自分の存在を認める相手がいるのならそこに居座るだろう。私ならそうする、いや、私は小人ではないし、誰かに徹底的に無視されたことはない。が、とにかく無理に排除しようとする、害虫のように小人はその対処法を覚えていく。最悪の場合、私の家から小人が駆逐し切れなかった場合、小人はその駆逐方法の対抗のために巨大化しているかもしれないではないか。

結果、私と巨大化した小人の二人暮らしたらどうする。

傍から見れば中年男性と二人で暮らしていることになるではないか。しかもその私は、巨大化した小人を日夜排除しようとしているのだ。さらに言えば、相手が喜んで家に居座っているのに、だ。

私は断じてツンデレの類ではない。

ぼぼべろべろびばらびらびるぼる

やかましいぞ、ぼべろんば。みんなで散歩に行つてきなさい。門限は無視していい。

顔を洗おうとすると、洗面台でぼべろんばがハンドソープによって泡だらけになっていた。私はうんざりとした気分になって、洗面台の排水口のフタを閉め、水を出してやった。せめて綺麗になろうとしているのなら、その気持ちを汲んでやらないことも無い。卵を食ったぼべろんばにも、その文化的な行動の意味を教えてやってくれ。

私はベッドに戻り、読書をすることにした。寝られないのだから仕方がない。まずはこの空間に慣れてしまつことが重要だと、直感的に思ったのだ。

寢床の本棚に手を伸ばした。サスペンス小説が読みかけだったので、この物語世界に精神を融和させることにした。そうすれば、ぼべろんばの介入を受けることはないだろう。

ぼられるぼろろびらびらべるぶるろぼぼるばぶ

そのまま三時間、ぼべろんばの声を聞きながら、私は小説を読みふけた。

その間ぼべろんばが話していたことをここに記す。

ぼべへへぶぶびびぶるるびばべろばぼびぶぶれるるびばぼぼびびぶ
ばれるるぶへぼぼばへぶびびねねららびばぼぼららびばぼぼねねらら
るぼびぶびらびねねびぶぼぼららびねねららびらびらびらびらびら
びりぶるるばばららびらびりびりびらびらるるへへぶびびぶるるび
ばべろばぼびぶぶれるるびばぼぼびぶばれるるへへぼぼばへへび
びねねららびららびらびねねららびらびらるるびびぶびららびらる
らららびりぶるるびらるるぼるるへへねねるるばぶぶれるるびばぼ

らびねほびぶぼぼらびねびらるぼらびらるらばらびりぶるば
ばばらぶぼらびりばびらぶらるぼへへぶばびぶるるびぼへるぼ
びぶぶるるびばぼぼびぶばれるぶへぼぼばへぶびぼねぼ
ぶばらびぶぼねらねびびるほびびるばらびらぶるらばらびり
ぶるばびるぼるぼるへへれるぼるぼぶぶるるびばぼぼびび
ばれるぶへぼぼばへぶびねぼねぼねばらばらびぶぼねらねび
るぼびぶびらびねびぶぶぼぼらびねぶらぼるぼらびらぶるらば
らびりぶるばばらぶぼらびりばびらぶらるばびるぼるぼるへ
べれるぼるぼへへぶびぶるるびばへるるるびばへるぼびぶ
ぶれるびばぼびぶびるほびびらびねびぶぶぼぼらびねび

こんな調子だったので、二十分ぶんで中断をすることにする。

無駄だ。

晩御飯を作ることにして、私は炊飯器に手をかけた。中にぼへるんばが居ないことを祈っていると、急にはかばかしくなり、素直に開けた。中には誰も居なかった。もしかするとぼへるんばは、案外良心的な生き物なのかもしれない。

そうして私は米を洗い、炊飯器にセットし、炊いた。おいしく米を食べる気などない。

炊けるまでの一時間で、おかずの準備をすることにする。

今日は親子丼と納豆でいいだろう。

卵、醤油、みりん、砂糖、ぼへるんば、酒、鶏肉、たまねぎを準備した。

肉の下準備をしなければならぬ。細切れにしようと包丁を振りおろす。

しかし、ぼへるんばが包丁を白羽取りした。

そう。私が一時間前から、簡単にできるはずの親子丼を作ることにしたのは、このためだ。

ぼべるばびば

小人はおそらく、私の食材を自分のものであると勘違いしている。現在私の調理行為を妨害するぼべるんばは、白羽取りをするぼべるんば、足の両爪をはがそうとするぼべるんば、肉を抑える手に乗り、狂ったように地団太を踏むぼべるんば。そして、ハンドソープを肉にかけようとする、綺麗好きのぼべるんばだ。

どうしてこうなった。

一瞬でもぼべるんばが良心的な心を持ったぼべるんばであると思つたことを後悔した。こいつらは私利私欲のために生きる、純粹なぼべるんばでしかないのだ。そうだ、人間とは違う価値観を持ち、人間とは違う文化体型を持ち、人間とは違うサイズで生きている。スーパー・サイズ・ユー。死に腐れ、ぼべるんば。

私は白羽取りを中断させ、包丁に力を込めるのをやめた。フェイントに警戒して、白羽取りぼべるんばはまな板の上でボクサーのような軽いステップを踏んだが、私が包丁を振らないことに気付くと鼻で笑って見上げてきた。

真つ二つにしてやろうと思つたが、私はそこまで野蛮ではない。こうなれば、いかに武力を講じずに彼らを圧制するかによって、私の人間としての真価が決まるのではないかと。思うことにしなれば、ストレスでぼべってしまう。

どうやってぼべるんばの……。

……いや、私はまさか、この白羽取りによってぼべるんばの存在を認めてしまったのではないか。

否応なく真つ二つにし、まな板をぼべるんばでいっぱいにして、足の両爪を剥がされ、左手を青タンだらけにして、さらに肉にはハンドソープをぶっかけれ。それを全て無視して親子丼を作った方が、私の全うな人間的行動は損なわれなかったのではないのだろうか。ならばどうする。

すると、ハンドソープを構えるのをやめたぼべるんばが、私に親

愛の目を向けていることがわかった。

中年男性の顔をしているが、なかなか可愛げがある。もしぼべろんばを真つ二つにしていれば、このぼべろんばも閻魔大王のごとく、判決を下すように腕を振りおろしただろう。ハンドソープのプッシュノズルに。

私は何度か舌打ちをして、台所に黙って立った。

果たして、私がこれから取るべき行動は、何だ。

試しにタマネギをとってみると、ぼべろんばはどうでも良さげに流しから飛び降りていった。もしかすると野菜には興味が無いのかもしれない。

皮を剥き、玉ねぎに包丁を立てる。ぼべろんばは動かない。ハンドソープのぼべろんばが、まな板の横で腕を組み、現場監督のように顔をしかめているだけだった。

さくさくと切っていく。今日は卵丼だろうか。

そうして玉ねぎを切り終わると、ごろごろと音がし始めた。

別室には、私の作業場がある。とりあえず私は、そちらにいくことにした。

中ではぼべろんばが、手動ろくろで楽しそうに遊んでいた。私の作業場には電動ろくろと手動ろくろがあるのだが、古くなってつかわなくなった手動ろくろは気が向いたらつかう程度で、現役とはいえなかった。

そんな手動ろくろで楽しそうに遊ぶぼべろんばは、どこか幼少期の私を思い出させる。

ただ回転するろくろをいじり、回せば回すほどどこか楽しくなっていく。当時は私も回すだけで十分に楽しめていたのだが、そんなろくろの上に粘土を乗せ、好きにかたちをつくり、それが湯のみやちよつとした食器に変わる。ただ回転するろくろに娯楽が加われればこれこそ楽しくないわけではない。

私は食事を作っていた手だったが、ぼべろんば達に陶芸を教えるみようと思った。

この回転するろくろの上で跳ねまわる彼らに、粘土を与えてみると、どうなるだろうか。私よりも繊細な作品を作り上げることができないのではないだろうかとも、僅かに残った子供心に思ってしまった。

私は電動ろくろの前に座り、粘土を取った。

隣のろくろを一旦止めると、ぼべろんば達は慣性と遠心力で吹っ飛んだ。その隙に粘土を手動ろくろに置いて、私の電動ろくろにも置いた。

またぼべろんば達はろくろに上り、回転を始めた。

私も電動ろくろを回し始め、彼らにちらちらと視線を向けた。

ぼろぼらべばらびりるるる

私が粘土を細長くしているのを見て、手動ろくろに乗って回転するぼべろんばは、ぐるぐると回りながら私の手元に指をさした。するとどうだろうか。

ぼべろんば達は私と同じように粘土に力を加え、私の粘土と同じ形をつくりあげたではないか！

これは素晴らしい発見だ。ぼべろんば達はどうやら私と同じスペックの視神経を持っているらしく、それを二次元的に真似することまでできてしまう。さすが、おっさんの面構えなだけはある。その作業の顔も、どこか職人然としていた。

ぼべろんばはそのまま、私が適当に作った湯のみの外観を完全にコピーした。一旦止めて、私の粘土の中が凹んでいるのを見せると、ぼべろんばの一人が粘土の上に立ち、その凹みも造形した。

す、すばらしい！これがぼべろんばだというのか！

私は絶叫したくなる衝動をこらえ、ぼべろんばの作った粘土を手にとった。

これは乾燥させ焼いたものをぼべろんば達に届けてやるのがいいのではないだろうか。見よう見まねで作ったとはいえ、自分で初め

て作った湯のみというのとはなかなか感動をするものだ。私も不格好なものであるが、まだ処女作を所持している。父との唯一の思い出でもあるのだ。

私が感心して眺めていると、ぼべろんば達は興味がなくなったのか隣の部屋に戻ってしまった。

私は乾燥台にぼべろんば達の作った粘土を置き、私のものと区別して放置することにした。

ぼばばばばればればびびぶぶらぼべれれるりぼ

台所に戻ると、ぼべろんばは揃ってテレビを見始めていた。いつの間にもリモコン操作を覚えたのかと思っただが、敢えて訊かない。今の中に親子丼を作ってしまったえば、おそらく彼らは気付かない。

数えてみるとぼべろんばは、テーブルに二十人ほどいた。全員でどれくらいいるのかを考えながら、私は肉を細切れにした。

フライパンに醤油とみりんと砂糖とほんだしと水を入れ、かき混ぜながら熱する。それから玉ねぎと肉を入れ、少し待った。

テーブルの方を見ると、ぼべろんば達は動物番組に夢中だった。おっさんの顔をしているくせに、随分と子供っぽいところがあるのだな、と嘔き出してしまった。

どんぶりにご飯をよそう。玉ねぎと肉が煮えたところで、卵を手にとった。中身はちゃんと入っていた。

こんこん。と、私は卵の中身をフライパンに投入した。

ぼべろんばべー！

卵から一人のぼべろんばが、フライパンの中へと落ちていった。

ぼべろんばは親子汁の中に飛び込み、ちゃぷんと音を立てると同時に、耳を引き裂くような絶叫をした。

そして、二十人ものぼべろんば達が、ゆっくりと私に振り返った。

ぼろりれびびばらばらばらりる

彼らは一斉に、身も凍るような声を吐きだした。

もつとも何を言っているか分からなかったので、そのままフライパンの中でぼろんばを煮た。菜箸で取るうとも思ったが、静かになつてからの方が利口だ。今はやかましくて、うつつしい。

他のぼろんば達も気のせいだと思ったようで、シェパードの散歩の模様に目を戻した。

滞りなく親子丼の具が完成したので、よそつた米の上に乗せる。

これで私の夕食は準備されたことになり、彼らぼろんばの糞の役にも立ちそうもない防衛力による阻害行動をスルーさせるということで看破したことになる。我ながら中々思いきつたところだろう。

さあ、と箸を持つ。テーブルのぼろんば達の後ろに陣取るように床に座り、私は親子丼を食べ始めた。

ぼべ

ろべ

煮えたぼろんばを食べる瞬間、何か聞こえたような気がしたが、私の知ったことではない。

そして次の朝。

目を覚ますと、ぼべるんば達は居なくなっていた。

もしかすると、夏の暑さにやられて見た幻想だったのかもしれない。いや、やはり、と言うべきか。私は所詮、イカれた父親の息子である。それなりの社会生活を送れているつもりだが、それなりの異常性は遺伝していても不思議ではないのだ。

私は服を買おうと思っていたことを思い出して、外へ出ることにした。父に一万を渡してしまったので、また銀行に行かなくてはならない。

「お父さあん、お母さあん」と、父が交差点の隅の献花された花の匂いを嗅ぎながら、アスファルトに這いつくばっていた。あとで金をやらないと、またお役所に迷惑がかかる。

銀行に行き、服屋に行った。何を買おうと思っていたのか失念していたが、適当なジャケットとシャツを買った。帰り道に父を見なかったので、私は家に帰る。

少し広くなった家を片づけ、私は陶芸でもしようかと作業場に行った。

「あ……」

そこで私は、乾燥台の上にある二つの粘土を、見つけた。

「これは……」

これは、私とぼべるんば達と一緒に回したものだ。

私の作ったほうが形状は整っているし、バランスもある程度取れている。

しかしぼべろんば達が手を入れたものは、それ以上に、温かみがあった。

歪んでいて、妙な凹みがあって、土台の中心を意識できていない。おそらく、これを焼いてもひび割れてしまう、そんな不格好な……。

……幼いころの私と、同じではないか。

「ぼべつ　！　ぼべろんばあつ！」

私は彼らの名前を呼んだ。

聞こえているかはわからない。

私の自己満足のために、ただ叫びたかっただけなのかもしれない。だが私の握る、固くなつたこの粘土は……。

この、作品だとは呼びようのない、温かい造形物は……！

「ぼべろんば！　ぼべろんば！」

彼らの居た証明。彼らが居た証拠。彼らが居た、生きていた、その燃えていた命そのもの。嘘じゃないのだ。これは本物なのだ。彼らが楽しげに、私を真似して、そう、子供のように無邪気に作り上げた、結晶なのだ！

「ぼべぼつ……ごぼつ！　ぼべろんば！　ぼべろんば！」

私は彼らの名前を呼ぶ。失くしてしまったわが子を探すように。消えてしまった彼らの、私が無視してしまおうとまで考えた彼らの、その存在を、受け入れるように。

「ぼべろんば！　ぼべろんば！」

私は泣いた。嗚咽を漏らした。一人でどうして、ここまで涙が出るのだろうか。たった一日触れあった彼らに、どうして私はこう振る舞えるのだろうか。

いいや、考えるまでもない。

「ぼべろんば！」

それは彼らが、遠い日の私と、そっくりだったからだ。

私は彼らの名前を呼びながら、彼らの生の分身を握りながら、外

へ飛び出した。

「ぼべろんば！ ぼべろんば！」

私は傍から見れば、あたまのおかしくなった狂人に見えただろう。暑さに頭がやられてしまい、避暑地を探す変質者に見えただろう。

それでいいのだ。ただの小人の幻想にしがみついているような私は、この時、きっと普通じゃなかったのだ。

だが当然だろう。

あの日の自分の影を追う大人は、居ないのだから。

遠い日の、いつかの輝かしい毎日に生きる私は、社会という精神的僻地に追いやられ、その彩りを失ったのだから。

大人は、子供じゃない。

楽しむ私はいつか、それを与える側の存在へと変わる。

きつとそれが世界の理なのだろう。それがきつと、大人になるということなのだろう。

だからこの時、大人の私は、子供になっていた。

世界の理に背くのだから、私は、狂人となっていたのだ。

「ヤスオ！ お前もこっちにこい！」

「ぼべろんば！」

交差点の前で父が腕を広げていた。

まるでそれは夏の幻影のような。

ただ親と子がじゃれあうだけの、過ぎた日の一ページ。

ぼべるばべべぼ、るればらぼべび。

ぼべろ、べるびべぼ。

ある土曜日に目を覚ますと、私の枕元に変なおっさんが寝転がっていた。

ぼべろびべぼ！ ぼべろんば！

そのおっさんは手に湯のみを持っていて、私に怖がるような目を見てきた。

「くれるの？」

ぼべろんば、と可愛く頷いた。

何を言っているかわからなかったけど、そのおっさんは行方不明になった弟に似て、人懐っこかった。

昨日会社の飲み会だったし、どこで拾ってきたか知らないけど。

私はなんとなく、このおっさんを飼ってみようと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7428t/>

るばらびらばらぶる

2011年10月7日02時15分発行